聖華快楽書店
R18
ADULT ONLY
～愛と正義のヒロインが敵幹部に
快楽に堕ちるまで～
洗脳調教され
魔法少女
セイントリリィ
ADU
原案：エルトリア
イラスト：なまひゆ、kageli

リリィフレア

リリィマリン

「んっ……」
フレアが目を開けると、見覚えのない天井が広がっていた。
石なのか金属なのか、あるいはもっと別のなにかなのか。何でできているのかもわからない真っ白な天井と、同じ材質でできた壁と床。
窓ひとつなく、息苦しさすら感じる部屋の中には、フレアが寝かされていたベッド以外に調度品らしいものもなにもない。清潔感こそあるものの、それはよく手入れされた清潔感というよりも、生き物の存在を感じられない無機質さだった。
「こ、こは……？　なんだか牢屋みたいな……」
意識の覚醒にあわせて、意識を失う前の記憶が蘇っていく。
「そうだ。私……ネビュラに捕まって――」
「ふふっ。どうやら目が覚めたみたいだねぇ。リリィフレア」
「その声……ネビュラ！」
声のした方向へとフレアが振り返ると、あったのはスピーカーだった。
「まりな……マリンは無事なんでしょうね」
フレアの問いかけに、回答はすぐにはなかった。
スピーカーの奥で何かを囁き合うような声が聞こえてから、ネビュラの声が返ってくる。
「えぇ。もちろん無事よ。今はまだ、ね」
「マリンに手を出したら許さないんだから！」
「ふふっ。それも全部、あなた次第よ。リリィフレア」
返されたその言葉に、フレアは眉をひそめる。

「どういう意味？」
「あなたが素直でいるうちは、マリンに手を出さないことを誓ってあげる。偉大なる淫堕神ネビリム様に誓って、ね」
「くっ……」
「これからあなたのところに行くけど、変な気を起こさないことね。私を傷つければ、マリンがどうなるか――」
「わかってるわよっ……！」
フレアが返すと、その直後、部屋の扉が開いてネビュラが入ってくる。
一瞬、開いた扉に飛び込むべきだとフレアの魔法少女としての経験が訴えてくる。
だがそれはできない。そうすれば、代わりに責め苦を受けるのはマリンになるのだから。身代わりになる覚悟なら既に出来ているのだ。
そう逡巡する間に、開いた扉は再び閉まっていた。
（大丈夫……何をされたって、絶対に負けたりしない……）
不屈の意志を自分に言い聞かせるように頷いて、フレアは近づいてきたネビュラを見上げる。

「おはよう、フレアちゃん。邪魔をされていたときにはただのムカつく小娘だったけど、こうして改めて見てみるととっても美味しそうね……」
「なっ、なによ、気持ち悪いっ」
「可愛らしい顔立ちにもちもちのお肌、生意気そうなその瞳もとっても魅力的……おっぱいは物足りないけれど」
上から下へ、そして今度は下から上へ。
蛇の舌に舐められるようなネビュラの視線に、フレアの背筋を怖気が走った。
「う、うるさいっ！　余計なお世話よ！」
「あら。大事なコトよ？　これからあなたはあたしのオモチャになるんだもの」
「っ……私に、エッチなことするつもりなんでしょ」
相手は仮にも世界を淫欲によって堕落させようとする淫堕神の使徒を名乗る存在だ。
そんな相手に捕らえられて、自分がどんなことをされるのか想像できないほどフレアは馬鹿ではない。すべて理解している。だからこそ、フレアはマリンの身代わりになったのだ。親友であり、相棒であり、魔法少女としての後輩でもある彼女をそんな目に遭わせることは、フレアにはできない。
「エッチなこと、ね。えぇ、そのとおりよ。エッチなこと、だなんて、中学生の女の子が口にする程度の言葉じゃ想像もできないくらい、とびっきりいやらしくってキモチのイイこと、たっぷり教えてあげるわ」
「くっ……」
「手始めに、そうねぇ。ネビュラ様、私リリィフレアをいやらしく調教してください、と

でもおねだりしてもらおうかしらぁ？」
嗜虐的な笑みを浮かべるネビュラに、フレアは奥歯を噛み締めて屈辱に耐える。
もちろんそんな言葉、普段ならば口が裂けても言いたくなどない台詞だ。しかしマリンを人質に取られている今、フレアに選択肢はなかった。
手の平に爪が食い込むほど両の拳を握り締めながら、フレアは口を開く。
「ネビュラ、様……わ、わたし……リリィフレアを……いやらしく、調教して、ください……これで満足？」
「感情が籠もってないのは残念だけど、今はそれで許してあげる。調教が終わる頃には、あなたもエッチなことがだぁい好きな、エッチな女の子になっているわ」
「誰がそんなことっ……！」
「ふふっ。強がっちゃって。でも、そんなトコロも可愛いわよ」
ネビュラはフレアの耳元に口を寄せ、囁きかける。
ネビュラの吐息がかかり、ゾクッとした悪寒がフレアの背筋を走る。
ネビュラは舌なめずりをすると、そのまま唇で首筋をなぞるようにキスをした。
「ひゃっ！？」
思わず声を上げるフレア。
ネビュラはそんな反応を楽しむかのように、今度はフレアの胸を揉みしだいた。
服越しとはいえ、他人に触られたことのない場所への刺激に、嫌悪感と恥ずかしさがこみ上げてくる。
フレアは唇を強く噛み締めて、なんとかその不快感に耐えていた。

「じゃあ早速はじめるとしましょうか」
「はじめる……ってなにをするつもりよ？」
「そんなの、あなた自身の口で言ったばかりじゃない。あなたの身体を、いやらしく調教してあげるのよ。淫堕神ネビリム様の使徒に相応しい、快楽狂いにね。抵抗したいならしてもイイけど、その場合は――」
「マリンにするって言うんでしょ？　わかってるわよ。抵抗なんてしない……好きにしなさい。だからっ……」
「えぇ。わかってるわ。あなたが素直に調教を受けているうちは、マリンには手を出さないであげる。美しい友情ねぇ」
　白々しく笑うネビュラに、フレアはギリギリと奥歯を噛み締める。
「そうだ。イイコト思いついたわぁ」
「っ……どうせ、ロクなことじゃないんでしょう？」
「あら？　あたしの愛撫じゃあお気に召さなかったみたいだから、自分で触らせてあげようと思っただけよ。オナニー、してみせなさい？」
「オナっ……！」
「なぁに？　その歳でオナニーを知らないわけじゃあないでしょう？　呼び方は何でもいいわよ。なにが良いかしら。自慰？　マスターベーション？　自涜（じとく）？　マスかき？　それともマンズリ？」
　ネビュラはわざとらしく指折り数えながら、下卑た笑みを浮かべてみせる。
　フレアは顔を真っ赤にして俯いた。

経験がないと言えば嘘になる。だが、それを人前で晒け出すというのは、年頃の少女にとって耐え難い羞恥だった。

「いいのかしら？　あなたが嫌だと言うなら、マリンに代わりにしてもらうことになるけど？　別に私はどっちでもいいのよ？　あぁ、いかにも清楚な風のマリンのマンズリも見たいわねぇ」

「――ッ！　わかってるから、マリンには手を出さないで！」

「あら、そう？　あたしだってこんな古典的な脅迫、何度もしたくないのよ？　誰かさんが素直ならね」

意地悪いネビュラの言葉に、フレアはこれ以上の反論を諦めた。

反論したところで事態は好転しない。それどころかネビュラを楽しませることになるし、最悪、マリンの身に危害が及ぶ可能性も増す。

自分が辱めを受けさえすれば、マリンのことは守ることができる。自分にそう言い聞かせながら、フレアは意を決して羞恥に震える指先をスカートの中へと潜り込ませた。

「あら、ダメよ。服の下でちょこちょこっとイジるだけだなんて、ちっとも面白くないもの。スカートをたくしあげて、見えるようにしなさい？」

「く、うぅっ……わかった、わよっ……！」

言われたとおりに、フレアはスカートの裾を掴むと、そのままゆっくりとたくしあげる。

羞恥ゆえのその遅さは、しかしネビュラにはストリップダンサーのような焦らしのように映っているのか、ことさら急かすこともせずに、ニヤニヤと淫猥な眼光を送り続けてくる。

露わになったのは飾り気のない白のショーツ。
だがその中心は、うっすらと白よりも濃い色の染みを浮かべていた。
（なんで……わたし、もう、濡れてっ……）
「あらあら。もう濡れてるわね。正義の魔法少女リリィフレアは公開オナニーで興奮する変態さんなのかしら？」
「ちがっ……私はそんなんじゃっ……！」
否定しようとするものの、湿り気を帯びたショーツは現実だ。
フレアは気付いていないが、部屋の中には無色無臭の媚薬ガスが極めて高濃度で充満している。
魔法少女だからこそ、何故か身体が火照っているという程度で済んでいるフレアだが、一般人であればひと呼吸しただけで、恥も外聞もなく色狂いになるほどの強力なもの。
魔法少女としての才能の経験が豊富なフレアは、それほど濃密な媚薬であっても、無意識のうちに軽減してしまっている。その事実が不幸にも、自分の身体に起きている異変を、異変と捉えられなくしていた。
ネビュラの告げた言葉の通り、自分が見られて興奮する変態なのではないかという疑惑がフレアの中を駆け巡る。
「ほら、見てほしいんでしょう？　だったらちゃあんと、見てくださいっておねだりしてからはじめなさい？」
「くっ……リリィフレアのオナニー……ご覧になって、ください……」
顔面が、炎の魔法を使ったかのように熱を持つ。

フレアも年頃の女の子だ。性に対して関心はあったし、自慰の経験だってある。
だからといってそれを誰かに見せたことなどもちろんありはしない。
それを、こともあろうに敵であるネビュラに見られるのだと思うと、羞恥の心は余計に燃え上がる一方だった。
「あなたの身体は見られたくって待ちきれないみたいだし、さっさとはじめなさい」
指先をショーツへと宛がうと、それだけでくちゅり、と淫らな蜜音が生まれた。
その音をネビュラは聞き逃さずに、唇を半月に歪めてみせる。
今までに味わったことのない屈辱感に、涙が溢れそうになる。
それでも、マリンを救うためには、この屈辱に耐える以外になかった。
フレアはぎこちない手付きで、自らの割れ目をなぞりはじめる。
その瞬間、
「んっ……んんっ……♥」
普段自分で慰めるときとは比べものにならない快感が背筋を駆け上がり、出したくもない喘ぎ声が溢れ出た。
「あら……♥　えっちな声ねぇ。ちょっと触っただけでいやらしい声が出ちゃうなんて、リリィフレアは淫乱さんねぇ。それともやっぱり、見られて感じちゃうコ？」
ふるふると首を横に振りながら、フレアは自慰を再開する。
「んっ……く、ぅんっ……♥」
必死に声を抑えようと努力するが、どうしても漏れ出てしまう喘ぎ声がフレア自身の心を責め立てる。

「ぎこちないわねぇ。変態さんの割りにオナニーの経験は少なめなのかしら？」
「うるさ、んんっ♥」
反論しようとした瞬間、期せずして敏感な箇所に触れた衝撃で甘い声が漏れる。
（ネビュラなんかに見られて感じちゃう、なんてっ……それじゃ本当に、変態みたいじゃないっ……）
ネビュラの言葉で生まれた疑念は、自らの指でなぞってゆくたびに明確になっていくようで、それが恥ずかしい以上に恐ろしかった。
「ふふっ♥　キモチイイところが見つかったのかしら？　でも、まだまだ下手っぴねぇ。そんなんじゃいつまで経ってもイケないんじゃないかしら」
ネビュラは嘲笑しながら、華奢な指先でフレアの乳首を摘まむ。
「ひゃうんんっ♥」
決して強い力を加えられたわけではない。指の腹と腹とで転がすような、むしろ優しくすらある動き。それなのに、伝わってきた官能は割れ目をなぞっているのとは比べものにならないほどの強さだった。
フレアは慌てて口を塞ぐが、時既に遅し。
「なぁに今の声？　ふふっ。リリィフレアってばとっても敏感なのね♥」
「そ、そんなことっ……！」
鬼の首を取ったように邪悪な笑みを浮かべたネビュラに、フレアは何かを言い返そうとして、諦めた。
（なに、今のっ……自分でシたときと、全然、違うっ……）

「ふふっ。今あなたが何を考えてるのか、当てましょうか？」
ネビュラの言葉に、フレアはふるふると首を横に振る。
「だ・ぁ・め❤　イヤでも当てちゃうわ。オナニーするより何倍も気持ちいいと思ってるんでしょ？」
（なんでっ……）
「今度はなんで、って思ったわね？　だってあなたの顔、とぉっても気持ちよさそうなんだもの」
「ちがっ……違うもん……！」
表情を指摘されて、フレアは頭を振って表情を戻す。だが鏡もない中、それがどれほどの意味を成しているのかはフレア自身にもわからなかった。
「あらそう？　じゃあそういうコトにしておいてあげる」
自分の否定が虚勢に過ぎないことも、それが見抜かれていることも、フレアにはわかっていた。だからといって快楽を認めるわけにはいかない。
「ほら、手を止めていないではやく続きをしなさい？　マリンが――」
「わかってるわよっ！」
フレアはヤケクソ気味に答えながら、懸命に手を動かしはじめた。
指先が割れ目をなぞり上げると、普段の何倍もの快感が背筋を駆けて、目の前がうっすらと白む。
ネビュラに見られていることを意識しないようにしようとすればするほどに、全身を舐めるようなネビュラの視線を強く感じてしまう。

「んっ、く、はぁっ……んぅっ……♥」
声を漏らさぬよう唇を噛み締めるが、それでも抑えきれない吐息と喘ぎ声が、静かな部屋に響く。ネビュラはその様子をじっと見つめながら、満足げに微笑んでいた。
蛇のような視線はフレアの羞恥心をさらに煽り立て、フレアはさらに昂ぶっていく。
「はぁ……んっ……うぁっ……んっ……♥」
命じられるまでもなく、フレアの手の動きが徐々に早くなっていく。
その動きに合わせて、フレアの口からは荒々しい呼吸音が聞こえだす。
（なに……これ……♥）
今まで経験したことのないような感覚が、脳髄の奥底から湧き上がってくるようだった。何かが込み上げて来るような、そんな予感。それがなんであるのか、フレアはまだ知らなかった。ネビュラの前で、それを見せてはいけないという理性と、それを早く味わいたいという本能とがせめぎ合う。
（でも、でもぉっ、シなきゃ、まりながっ……♥）
それが本当に親友のことを想っての思考だったのか、あるいは自分への言い訳だったのか、フレア自身にもわからなかった。間違いないことは、フレアが湧き上がるそれに身を任せると決めたこと。
ぐちゅぐちゅっ、と割れ目から淫猥な音が響き出す。
「んっ……んんっ……！」
フレアは無意識のうちに、腰を振り始めていた。その様子は、まるで男根を求める娼婦のようでもあった。

「あぁ……あぁぁっ……！」
「ふふっ。イキそうなんでしょう？　イッちゃいなさい？」
ネビュラの言葉はもう関係なかった。
異常なほどに昂ぶった身体の奥から溢れ出す淫らな欲求に抗えずに、フレアは一心不乱に指を動かす。まるで手が乗っ取られてしまったかのように、指先は巧みに動いて、フレア自身でも気付いていなかった性感帯を的確に刺激する。普段ならば恐ろしくて躊躇うところにも容赦なく責め立てる。
そしてついに、そのときが訪れた。
「あっ……あぁぁっ……！」
フレアは背中を大きく仰け反らせ、びくんっと痙攣した。股間からは小便とは違う透明な液体が、クジラの潮噴きのような勢いでぷしゅうと噴き出す。
頭の中がスパークし、視界の奥が明滅を繰り返す。
フレアが生まれてはじめて味わう性の快感の頂点――絶頂だった。
まるで、意識だけがどこか高いところへと吹き飛んでしまうような、浮遊感を伴う奇妙な感覚。怖いほど、しかしただ一度経験しただけで病みつきになりそうな快感。
直後、全身のあらゆる場所から力が抜けて、フレアはぐったりとベッドに身体を埋めた。肩を上下させながら、浅い呼吸を繰り返す。
「随分と派手にイッたみたいねぇ」
「イッ……た……？」
「あら……あんなヘンタイさんなのに、イッたのははじめてなの？　ふふっ♥　初めての

アクメで潮まで噴いちゃうなんて、素質あるわよ♥」
「そん、な……素質なんて、いらないっ……！」
余韻に浸っていたくなるほどの快感を、しかしフレアは意思の力で跳ね飛ばす。それでも声音が弱々しく震えてしまっていることは、他ならぬフレア自身が一番よくわかっていた。
キュン、キュンと。極大の快感を得たばかりの下腹部が、奥から疼きを訴えてくる。
もっと、もっと、もっとと。
今まで知らなかった、性の快感を、さらに強い刺激をとねだってくるのがわかる。
（どうして……）
今までは、こんなことなかったはずなのに。
フレアは自分の身体の変化が信じられずにいた。
「はぁん……もう、ダメよフレア……あなたのマンズリ姿、可愛すぎて、エッチすぎて、あたし、もう我慢できないわぁ」
「ネ、ネビュラ……？」
フレアは目を疑った。
ネビュラの股間には、女性にあるはずのないモノが、堂々と屹立していたからだ。
「なっ……それはっ……なんで、アンタ、男だったのっ！？」
「ふふっ。これ？　これはネビリム様に授かったお力で生やしているの。あなたのパパなんかよりもよっぽど立派でしょう？」
「しっ、知らないわよっ、そんなのっ！」

否定しつつも、ネビュラの言葉のせいで小さい頃に一緒にお風呂に入ったときの父親を思い出してしまう。しかし、記憶の中の父親のモノは、目の前に差し出されたネビュラのそれとはまるで違った。

「ほぉら、よくご覧なさい？　これが、今からあなたをオトナのオンナにしてくれるオチンポ様よ」

ネビュラの言葉に操られるように、フレアの視線はその股間に屹立するモノへと吸い寄せられた。

太く、長く、それでいて毒蛇の如く鎌首をもたげる様はそれ自体が独立した異形の生物であるような錯覚すら抱く。

ネビュラ自身の、モデルのようにスラリと均整の取れた女体の股間から、脈打つ血管を浮かばせる剛直が屹立している様は、悪い夢のような光景だった。

とろぉり、と。

鈴口から滲んだ透明な液体が、銀の糸を引いてフレアへと滴ってゆく。

「んふふっ。このコもはやくフレアの淫乱おまんこに挿入(はい)りたいって言ってるわぁ」

「ひぅっ……」

これまで、魔法少女として自分の何倍、何十倍も巨大な敵や、鳥肌が立つほどの不気味な化物とも対峙してきた。

だが、これほどの恐怖を味わったことはない。

ほんの数十センチの肉の槍が、これまで対峙したどんな敵よりも恐ろしかった。

自慰によって火照った顔が、火照りを維持したまま青ざめる。毅然とした態度をとらね

ばならないと思っていても、奥歯がガチガチと音を立てるのを止められない。
「あら……怖いの？」
「うっ、うるさいっ！」
「安心なさい。痛くなんてしないわよ。エッチなことがどれだけ気持ちイイことなのか、教えてあげる……❤　すぐにエッチが大好きな淫乱になるの。そうしたら……そうねぇ。お姉様とでも呼んでもらおうかしら」
「そんなの、私は絶対にならないっ！」
「オナニーであ〜んなに乱れておいて、全然説得力がないわよ？」
「そ、それは……」
ネビュラのふたなりペニスの先端が、割れ目に触れる。
「ひぅんっ❤」
人生初の絶頂を味わったばかりで、その余韻も冷めやらぬ敏感な割れ目に伝わってくるのは、フレアの必殺魔法のような灼熱の熱さだった。
いくら性の経験に乏しいフレアであっても、セックスがどういった行為なのかは知っている。こんなものを自分の中に挿入されたら、快感などの話ではなく、自分の身体がバラバラに壊れてしまうのではないかという恐怖すらあった。
だというのに、今にも散らされようとしている花唇は、初めて触れた巨根を前に、卑猥な蜜をじゅくじゅくと溢れさせて止まらない。
「ふふっ❤　とっても可愛いわよ。フレア……だけど、屈したりしないって言うんなら覚悟しなさい？　あたしも、たまには調教を楽しみたいもの」

興奮した様子で早口にまくしたてると、ネビュラは大きく腰を突き出した。フレアの膣内へ、凶悪極まりないネビュラの巨根が一気に侵入する。

繊維が引き千切られるような深いな音とともに、フレアの視界が白く染まった。

「っ――――――――――――――――――――♥」

痛みに、ではない。今しがた自慰によって到達したものと同じ――否、それを遙かに上回る、途方もない快楽の波に。

（なに、これぇっ……♥）

指とは比べ物にならない圧迫感に息が詰まる。だが、その息苦しささえもが快感に変換され、フレアの全身を駆け巡った。

快楽の暴風は、たった一突きでフレアを絶頂の高みまで押し上げた。

柔らかなベッドに頭をめり込ませんばかりの勢いで、フレアは背中を大きく仰け反らせる。ピンボールの球のように、意識が一瞬で高く弾き飛ばされるような感覚。

「あらぁ♥　変態フレアは処女を奪われただけでイッちゃったのかしら♥」

「そん、にゃ♥　んぃぃ♥」

「ならもっと、もっと、もぉっと……あたしのふたなりチンポが大好きになるまで狂わせてあげるぅっ♥」

絶頂の余韻に浸る間もなく、ネビュラは抽送（ピストン）を開始する。

絶頂の直後で敏感になった身体は、ひと突きされるたび、フレアの意識を高く高く打ち上げる。絶頂を繰り返せば繰り返すだけ、その快感は大きく膨らんでゆく。

膣内が収縮を繰り返し、膣内の異物を締め上げると、さらに大きな絶頂が押し寄せてき

た。
（なにこれぇ……！　すご、すぎるっ♥　セックスって、こんな、キモチ、いいのぉっ？）
絶頂を繰り返しながら、フレアは、自分が自分でなくなってしまうような感覚を覚えていた。
それは、フレアの十余年の人生で完全なる未知の体験だった。
初めてのセックスだというのに、まるで慣れ親しんだ相手のように、フレアの膣内はネビュラのペニスに絡みつき、子宮口が亀頭に吸い付いて精液を搾り取ろうとする。ネビュラの腰の動きに合わせて、フレアの腰が動き始める。
「んふっ。身体の方は早速素直になってきたみたいよ？」
「う、うるひゃいぃ……！」
快楽に染まった声で反論するも、フレアの表情はすっかり蕩けきっていた。
その様子は、とてもではないが先ほどまでの凛々しい姿からは想像できない。
「んふふっ。まだ強情を張るつもり？　まあいいわ。時間はたっぷりあるんだもの」
ネビュラはそう言って、フレアの身体を抱きしめた。
そのまま唇を重ねると、フレアの舌を絡め取り、唾液を流し込む。
「んぐっ……ちゅぱっ……はむっ……ぢゅるるっ……れろっ……はぁっ……んっ……♥」
今のフレアに、それに抗う理性はなかった。流し込まれる唾液を呑み込み、絡んでくる舌を追い返すでもなくされるがままに愛撫を受け入れる。
もちろん快感は口の中だけではない。唇を重ね、舌で繋がったまま、ネビュラは激しく腰を打ち付けてくる。

フレアは為す術なく膣内で暴れ回る肉棒を感じながら、膣壁を擦られる度に絶頂を迎えていた。絶頂を迎えることで膣が締まり、ネビュラの肉棒の形をはっきりと感じ取ってしまう。

「んはぁっ……あっ……はぁんっ……んんっ……♥」

激しい抽挿（ピストン）が続く中で不意にネビュラが口を離すと、互いの口から銀色の橋がかかる。

その光景が妙に艶かしく見えてしまい、フレアは顔を赤らめる。

「んぃっ♥　や、えっ♥　やめっ♥　うごか、にゃいれぇっ♥」

「無理よぉっ！　こんなに具合のいいオマンコ、動かずにいられるわけないでしょ！　文句ならあたしのチンポに吸いついてくる自分の淫乱マンコに言いなさいっ！」

どれほど口で否定しても、膣肉がネビュラの剛直にキュウキュウと吸いついていることを誰よりも理解しているのはフレア自身だった。

カリ高の肉棒が狭い膣内で往復するたび、自分自身の膣圧によって押しつけられた肉槍の感触を感じてしまう。

「あぁもう、最っ高……♥　あのクソ生意気なセイントリリィも、こうしてチンポをぶち込んであげたら可愛い仔猫ちゃんなのねぇ♥」

ネビュラはスパートをかけるように勢いよくピストンを加速させる。

「ひゃあんっ！？　らめっ、激しすぎっ……ああぁっ♥」

「んふふっ。もうすぐよ。もうすぐ、あたしのザーメンたぁっぷり注いであげるわぁ♥　ネビリム様にいただいた、ネビル因子がたっぷり詰まったネビルザーメン♥　あなたもネビリム様の忠実な僕になれるわよぉっ！」

「だ、誰がなるもんですかっ！」
「快楽を、欲望を受け入れなさい♥　そうすれば、もっと気持ちよくなれるわ♥」
加速したピストンが、先ほどまでよりもさらに深く、強く、フレアの膣奥を叩きつける。
それまで届かなかった深いところまで入り込んでくる圧迫感と快感に、嬌声が漏れるのを止めることができない。
「そ、そんなこと……！」
「そう？　でも、ここは正直よ？」
ぐちゅっ！　ぐちゅぅっ！　と。挿入したばかりのときとは明らかに違う、重く、粘ついた蜜の音。
膣内から伝わる刺激と外から聞こえる水音が、自分の秘所がどうなっているかを否応なしに自覚させられる。
「やっ、やめてっ……」
必死に懇願するフレアを嘲笑うかのように、ネビュラは腰の動きをさらに早めていく。
「あっ、あぅっ……」
「んふっ……」
快楽の波がどんどん押し寄せてきて、絶頂が近づいているのがわかる。
「んっ……出るわよぉっ……！」
「い、いやぁっ……！」
「イクときはちゃあんとイクって言うのよ？」
ネビュラの言葉は、絶頂直前の蕩けた頭の無意識の場所に、染み込むように響き渡った。

フレアの拒絶も虚しく、ネビュラは力強く腰を打ちつけ、亀頭が子宮の入口にキスをする。

「ほらっ、ほらぁっ！　射精るわっ射精るわよぉっ、フレアぁっ♥　あたしのおちんぽミルク、フレアのおまんこにびゅるびゅるってぇっ♥」

どぴゅっ！　ぶびゅるるるるっ！

熱い奔流が膣内を満たし、子宮が満たされてゆく。

同時に凄まじい絶頂に襲われ、意識が飛びそうになる。

「イクッ、イクイクイクイクゥゥゥゥゥゥゥゥッ！」

呪詛のように染み込んだネビュラの言葉が、フレアに無意識の絶頂宣言を口にさせた。

あまりの衝撃に、フレアの膣は強く収縮し、肉棒を締め付ける。その締め付けによって、ネビュラの射精はさらに勢いを増した。ネビル因子を帯びた大量の白濁液が子宮に流し込まれる。

ドクンッドクンッと脈打つ肉棒の鼓動が膣を通して伝わってくる。それがたまらなくキモチイイ。そしてそれがどれほどおぞましいことなのか理解し、拒絶するだけの理性は、今のフレアにはなかった。

十秒、三十秒、一分――あるいはそれ以上も続いただろうか。
絶頂の余韻に身体を震わせながら、ネビュラはゆっくりとフレアから肉棒を引き抜いてゆく。ゴポッと音をたてて愛液と精液とが入り混じった液体が流れ落ちた。
「ふふっ♥　フレアがあんまりにもエッチで可愛いから、いっぱい出ちゃったわぁ」
「うっ……あぁ……♥」
ネビュラは満足げに微笑むと、フレアの頬に手を添える。
「ふふっ♥　フレアだって、あたしのチンポ気持ちよかったでしょう？」
そう言って、ネビュラは再び唇を重ねた。
今度は、先ほどよりも長く、深く。
舌を絡ませながら、ネビュラはフレアの身体に手を伸ばす。
流し込まれる唾液にもネビル因子が含まれているのか、ドロリと粘ついた唾液が流れ込んでくるたび、頭の奥の深い場所から、堕落に誘う声が聞こえる。
受け入れさえすれば、もっと気持ちよくなれる。
ほら、呼びなさい。あなたが処女を捧げた、お姉様のことを。
――ネビュラお姉様。
音は出さず、口の中で、その名を呟いた。
その瞬間、
「んっ♥　んぅっ♥　あぁぁんぅっ♥」
「ほら、呼んでみなさい。ネビュラお姉様とね」
耳元で囁かれた言葉に、フレアは子宮が疼くのを感じた。

戦いの場で交わしたどんな言葉とも違う、ネビュラの言葉は優しく、甘かった。
耳の穴に、温かな蜜を流し込まれたように、鼓膜が甘美さに包まれる。
口に出せば、もっと気持ちいい。
ドクン、ドクンと子宮が高鳴る。
「ほら、呼んでみなさい？　ネビュラお姉様、とね」
「ネ、ビュラ……」
「えぇそう。良い子ねぇ。言いなさい。言えばとっても気持ちよくなれるわよ？」
口に出して、彼女の名を呼んだときに訪れるであろう巨大な快感に、身体が期待していた。
だけど――もしその言葉を口にしたら、もう戻れない気がした。
脳裏に浮かんできたのは、大切な親友の姿。
その直後、今すぐにも気持ちよくなりたいという浅ましい欲求を、正義の炎が焼き尽くし――
「ネ、ビュラ……おばさんっ！」
決して屈しはしないのだと、宣言するように、フレアはネビュラを睨みあげる。
「お、おば、ばばっ！　こっ……この私を、おばさんですってぇ！？」
「アンタなんて、私から見たらおばさんよ！」
「また言ったわね！　このクソガキィッ！」
（ダメ……もう、意識が……保て、ない……）
思わず鞭を振りかぶるネビュラだが、罵倒の言葉を吐き出したフレアは、意志力を使い

果たしたのか意識を失っていた。
「従順にしていたら優しく堕としてあげようと思ってたのに。許さないわ。どこに出ても恥ずかしい、どうしようもない色狂いにしてやるわ……！」